

# 同潤会の職工向け分譲住宅に関する一考察

—昭和7年に実施された2つの設計懸賞を中心として—

野々村 明佳里 (神奈川大学)

**1. はじめに** 財団法人同潤会(以下、同潤会)は、大正12年に発生した関東大震災の罹災者向け住宅供給を目的として大正13年5月に設立された日本初の公的住宅供給機関である。同潤会の住宅は、木造賃貸住宅(普通住宅)やRC造のアパートメント・ハウスが有名であるが、一方で郊外には木造庭付きの戸建分譲住宅も建設していた。この分譲住宅には、勤め人向け分譲住宅(昭和2年～昭和13年)と職工向け分譲住宅(昭和9年～昭和16年)の2種類があり、勤め人向け分譲住宅に関しては、拙稿<sup>1)</sup>を初めとして複数の既往研究がみられるものの、職工向け分譲住宅に関する研究の蓄積は少ない。しかし、職工向け分譲住宅の建設は同潤会後期の主要事業であり、同潤会解散後にその事業を引き継いだ住宅営団の事業の根幹となった重要な事業である。本稿では、職工向け分譲住宅の参考とすべく実施された2つの設計懸賞の特徴を明らかにすることを目的とする。

**2. 職工向け分譲住宅の概要** 昭和9年の三好町分譲住宅より建設が開始された職工向け分譲住宅では、昭和16年の同潤会解散までの8年間の間に15ヶ所1,105戸の住宅が建設された。職工向け分譲住宅は、現在の江東区や板橋区、大田区、川崎市などの軍需による職工の住宅難が発生していた工場地帯に建設された。

同潤会は昭和9年から開始される職工向け分譲住宅の建設に先駆けて、昭和7年9月に2つの職工向け住宅の設計懸賞を実施している。各懸賞の概要は以下の通りである。

**3. 職工向け分譲住宅設計図案懸賞** 「職工向け分譲住宅設計図案懸賞」は、全国の「一般技術者」を対象に「家族を有し一定の収入ある工場労務者のために現に支払いつゝある家賃と略々同額の月賦金の払込に依り、其の所有権を所得せしむべき住宅」を募ることを目的として開催され、昭和7年9月1日～10月25日の間に284通の応募があった<sup>2)</sup>。この設計懸賞は一団地の設計が求められており、後述する「工場労務者向け住宅の素人設計懸賞」と比較して非常に具体的な設計要件が示されている(表1)ことから、実践可能な設計案の募集であったことがうかがえる。入選案13案をみると、6～8種類・84～106戸程度の組み合わせが10案と、大多数を占めている。このように、住宅型式にバリエーションがみられる一方、勤め人向け分譲住宅にみられるような景観に変化を与えるランダムな配置がされている案は少なく、区画ごとにパターン化された配置が多くを占めている<sup>3)</sup>。

表1 「職工向け分譲住宅設計図案懸賞」と「工場労務者向住宅の素人設計懸賞」の設計要件

		職工向け分譲住宅設計図案懸賞	工場労務者向住宅の素人設計懸賞
応募期間		昭和7年9月1日～10月25日	昭和7年9月15日～10月31日
所要図面		<ul style="list-style-type: none"> <li>敷地区画図</li> <li>各階平面図</li> <li>立面図</li> <li>その他構造設備に関して特に考慮した部分がある場合はその詳細図</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各階平面図</li> </ul>
設計要件	敷地	<ul style="list-style-type: none"> <li>市街地建築物法適用地域</li> <li>瓦斯、水道施設あり</li> <li>4,000坪内外の平坦な矩形敷地</li> <li>方位、道路幅員等は随意</li> <li>一住宅当り敷地坪数は平均30坪以内</li> <li>児童遊園地等の共同施設のための空地を有すること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5間×5間=25坪以内</li> <li>二階建ての場合、二階部分は3間×3間=9坪以内</li> </ul>
	住宅の種類	<ul style="list-style-type: none"> <li>一戸建、5種類以上</li> <li>一戸当たりの延坪数は17坪以内</li> <li>13坪以内のものを2型式以上</li> <li>全住宅の平均延坪数は15坪以内</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平屋/二階建てのいずれも可</li> <li>一戸の延坪数は15坪以内</li> </ul>
	様式・構造	<ul style="list-style-type: none"> <li>木造</li> <li>単調に随するのを避ける</li> <li>気候風土に適合し耐震、防湿、防盜、防鼠等に留意し</li> <li>耐久性がある様工夫すること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本家屋一戸建て</li> <li>木造</li> </ul>
	建築費	<ul style="list-style-type: none"> <li>一坪当たり60円内外</li> <li>(電灯、瓦斯、給水、排水、門塙、植樹等の付帯設備費を含まない)</li> </ul>	

『素晴らしい簡易小住宅』『工場労務者の居住事情—職工住宅素人設計懸賞応募者並に応募図案に付き観察した統計報告—』より作成

この傾向は実際の職工向け分譲住宅でもみられ、大量供給の実現とともに景観への意識が薄れていたことがうかがえる。

#### 4. 工場労務者向住宅の素人設計懸賞 「職工向け分譲住宅設計図案懸賞」とほぼ同時

に開催された「工場労務者向住宅の素人設計懸賞」(昭和7年9月15日～10月31日募集)は、「計画実施上に万全を期する意味で、最も労務者生活の実情に即した住宅を建設する資料として、東京及び神奈川県に於ける工場労務者から素人設計を懸賞募集して衆意を聴く」ことを目的として実施された。素人でも手軽に応募できるよう、答案用紙には質問票が付けられており、応募者の家族構成や収入、現在の住まいについて問う項目が並んだ。結果的に、この懸賞には東京・横浜の職工から1,151通<sup>4)</sup>もの応募があり、職工自身の希望する間取りをはじめとして、同潤会は多くの職工の住宅事情を知り得た<sup>5)</sup>。

#### 5. まとめ

職工向け分譲住宅は、同潤会がそれまで展開していた勤め人向け分譲住宅とは異なる層に向けた住宅の供給であり、より大規模な住宅地の建設であった。同潤会は、実際の計画に着手する1年以上前から設計懸賞を通して設計案を収集するとともに、職工の住居に関する現状把握を行っていた。職工向け分譲住宅が人気事業となった背景には、このような綿密な事前調査の成果があったと推測される。

注釈 1) 野々村明佳里, 内田青蔵: 同潤会の勤め人向け分譲住宅事業の広報活動について—赤羽第二期・荻窪分譲住宅で開催された住宅展覧会を中心に—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), pp. 173-174, 2020, 野々村明佳里, 内田青蔵, 松川英莉奈: 同潤会最初の分譲住宅地・斎藤分譲住宅(昭和3年)の建設経緯について, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), pp. 655-656, 2021, 野々村明佳里, 内田青蔵, 姜明采: 同潤会の分譲住宅事業初期の平面計画について, 日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道), pp. 709-710, 2022 など。 2) 同潤会: 昭和7年度事業報告, p. 89, 1933。この懸賞の入選案13作は「工場労務者向住宅の素人設計懸賞」の入選案とともに『素晴らしい簡易小住宅』(1933)としてまとめられ、昭和8年4月に朝日新聞社より出版されている。 3) 実際に建設された職工向け分譲住宅でも同様の傾向がみられる。 4) 同潤会: 工場労務者の居住事情—職工住宅素人設計懸賞応募者並に応募図案に付き観察した統計報告—, p. 3, 1933。 5) 懸賞募集にあたり、同潤会は東京府下の職工15人以上の工場2,402ヶ所、神奈川県下の職工10人以上の工場128ヶ所の合計2,530工場に募集規程ならびに答案用紙を配布し、参加を呼びかけている。同潤会は質問票の回答をもとに、昭和7年当時の東京・横浜の職工の平均家賃を把握したことで、その相当額で持ち家を供給することが可能と判断し、職工向け分譲住宅の建設を開始している。職工向け分譲住宅は、借家の家賃と同等の金額を一定期間毎月支払うことで持ち家と土地を手に入れることができるため、職工からすれば得の多い話であり、大変な人気となった。